



階段



川崎ゆきお

「これも聞いた話だがな。神社そのものが妖怪変化じゃった」

老人が語り出した。

「高昌神社はよくある氏神様じゃ。山の根にチョンと座っとるように立っとる」

「それが妖怪なんですね」

「そうじゃない。神社は神社だよ」

「では、どうして神社が...」

「早い話、神も仏も妖怪も同じ連中なんだな」

「はあ」

青年は納得できないようだ。

「で、その男は神社近くに引っ越してきた。糖尿病が心配でな、毎朝歩いておった。高昌神社はそのコースに入っておったらしい。市街地よりは歩きやすく、緑も多いからのう。村がいつの間にか市街地になり、氏神様の役目も終えていたんじゃないやろうか。あまり手入れもされておらなんだ」

「神主は？」

「そんな大きな神社ではないらしく、氏子が少数残っている程度でな。その氏子も、代わりするにつれ、名ばかりの氏子になれ果てておったようじゃ」

「それで妖怪に？」

老人は即答しない。

「いつものように、その糖尿男は神社の階段を上がっておったとき、その階段が上がれんようになった」

「体調が悪くなったんでしょうか？」

「階段がなくなり、ただの坂道になったという」

「出ましたねえ」

「ちょっとやそっとの坂じゃない。急勾配じゃ。崖といってもよかろう。両手をつかんとおっこちそうなほど...」

「やってますねえ」

「下を見ると、さっきまでの階段もない。下の道は朝の散歩者が普通に歩いておる」

「怪異ですね」

「男は上りきることもできんし、下りることもできん」

「じっとしておると、ますます崖が高くなり、下に行く散歩者も小さくなっていきよる。上を見ると第二の鳥居は遥か彼方じゃ」

「階段の怪談ですねえ」

老人は無視する。

「その男、力つきて滑り落ちた」

「それがオチですか？」

「階段の二段目で足を滑らせ落ちただけじゃったようじゃ」

「二段目ですか。まだまだ序の口ですねえ」

「まあな」

了